
Kiss

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K i s s

【Nコード】

N 4 7 7 6 N

【作者名】

潤

【あらすじ】

ある男子が廊下を走っていてそのときに
女子にぶつかってしまう。
そしてそこから恋へと発展していく
物語です。

タツタツタツタツ。

廊下を走る一人の少年の名は

坂本 敦史。

ドン。

「うわぁ……」

誰かにぶつかった。

チュ。

坂本がぶつかったはずみで

ぶつかってこけた相手に

キスしてしまった。

「何すんのよ」

「ごめん」

ぶつかられた少女の名は

中井 結花。

「ごめんですむわけないでしょ。」

ウチのファーストキ、キ……ス」

「……ほんまごめん。」

そんなつもりはなかったん」

「うるさい！」

アンタ許さないんだから」

「んなこと言われてもなあ……」

（俺にとってもファーストなんだけど……）

キーンコーンカーンコーン。

「アンタ、何年？」

「3年ついでにクラス言うと2組」

「え、ウソ。」

先輩だったの？

「すいません、でも許しませんよ」
タッタッタタ。

そっういい走り去っていく中井。

翌日。

（あーこれからは廊下走らんとこ）
テクテク。

なんて考えつつ坂本は廊下を歩いていた。
（そーいやここか。

あの女の子とぶつかってキスしたの…。
なんか唇柔らかかったなあ…）

「でさーここ、ここ。
なんか走ってた先輩に

ぶつかられてキスされたの」
「マジで？

ついてないなあ」
「ウチのファーストは

亮にあげるつもりやったのに」
「ってアンタ片想いやのに

そんなことまで考えてるの？」
テクテク。

ちようどまた同じ場所で
坂本と中井はすれ違った。

「あ…、こいつよ。
こいつがここでウチにキスしてきてん」

「ごめん。
でもあれは不慮の事故や」

「って坂本先輩！？」
坂本の姿を見て驚く中井の友人がいた。

「早川ちゃんやん」

「え、晴。」

このキス魔と知り合いなん？」

「ちょ…。」

キス魔って。

何度も言うけどあれは不慮の事故や」

「知り合いというか

吹奏楽部の先輩」

「坂本さん！。」

もう人にぶつかってキスすんなよー」

そうして去っていく

中井と早川だった。

「結花。」

廊下でぶつかったのって

坂本先輩だったの？」

「せやけど、何？」

「いいなあ…。」

ふつともらした早川の言葉。

「晴。」

あんた、アイツが好きなん？」

「好きっていうか…」

憧れというか…。」

早川が体をくねくねさせはじめた。

「アンタがあいつ好きなのわかったわよ」

「ちがうって…。」

「告白に行くわよ」

「ちょっ…早い。」

「というか私そんな気ないのにー」

その日の昼休み。
グーグーZZZZ。

校舎の中庭の
草地でゴロンと

坂本が寝ていた。

「坂本先輩ー」

「やい、キス魔」

パチクリ。

「だ…」

カクン。

（俺は何も見えていない…。

早川ちゃんの友達のスカートの

中なんて見えてない…）

坂本が目を閉じたまま言う。

「早川ちゃんの友達の…」

「中井よ、このキス魔」

「ほんまゴメン」

「この前のことなら

まだ許してないからね。

というか目あけなさいよ」

「中井さん？」

移動してくれへん？」

「なんで？」

「このまま目あけたらというか

さっき目あけたときパンツ見えた…」

バシーン。

「この変態、キス魔」

「すいません、坂本先輩。

イメージがた落ちです」

「もういい。」

晴。

帰ろ」

早川の部活つまり吹奏楽の
コンクールが近づいてきた。

早川は中井にそれを見に来るよう頼んだ。

コンクール当日。

坂本ら中3にとってみれば
これで引退である。

中井は見に来ていた。

「えっとたしか晴はフルートだったよね。

トランペットの下の方…」

(トランペット…)。

あれか？

違うなあ。

あれはトロンボーンか。

あ…

アイツ、あのキス魔。

トロンボーンか。

ちよつと楽器構えてる姿

カッコいいかも…)

って何考えてるのよ。

「あ、演奏終わっちゃった。

キス魔は見つけれたけど

晴は見つからなかったや…」

コンクール終了。

坂本のいる学校は銅賞だった。

楽器運搬も終わり、

ミーティングも終わり、
後は帰るだけ。

「あ、あの坂本先輩」

早川が坂本を呼び止めた。

「何？」

「あ、あの最近

坂本先輩のイメージがた落ちですけど…」

「あーそやねえ。

中井さんには悪いことしたよなあ…」

「そーですよ。

結花にキスしたり、

パンツ覗いたりしてー。

先輩のイメージがた落ちですよ。

でも、正直言って…」

「うん」

「坂本先輩が好きです。

付き合ってください」

「ごめん」

ううううう。

早川は泣き出した。

それを坂本は背中に腕を回して

「ごめん」と優しくささやいた。

それを見たほかの部員は

「あーあー。

坂本、晴香泣かせた」

といていた。

翌日。

「結花ちゃん…」

「何？」

「坂本先輩に振られた…」

「よっしゃ。」

あのキス魔のどこ行こ」

「何で？」

「理由聞きに行くのよ」

「というかいる場所わかるの？」

「多分、あの草地」

テクテク。

「おい、キス魔」

「まだそれひきずる？」

結構経つよ」

「なんで晴ふつたんよ」

「なんでって…」

だって早川ちゃんは早川ちゃんやし、

俺よりもいい男ならわんさかおる」

「そうかもしれないけどさ、

数ある男の中でもあんたを

晴は…」

「もついいよ。」

理由聞けただけでも十分」

そして時は経ち

中井は坂本に会ったび

「このキス魔」と言っていた。

そーしているうちに

中井自身が坂本にひかれつつあった。

そして文化祭や体育祭があった。

そして中3の卒業式。

坂本は中学を卒業して

一人遠くの県の高校へ進学することになっていた。

坂本の出発の日。

吹奏楽部のメンバーには

全員坂本から前日に

明日出発だとメールがまわっていた。

そして早川はなぜか中井を誘って

吹奏楽部のメンバーと坂本の

出発を見守っていた。

「坂本先輩。

吹奏楽部のみんなで書いた

色紙です」

早川が部員を代表して渡した。

別に次期部長というわけではないが。

コンケールの日のことが

早川が坂本に告白したことが

他の部員の記憶に残っていたのであろう。

それで悔いや未練を残さないように

との配慮だろう。

しかしやはり憧れであり

好きだった先輩との別れ。

早川はまた泣き出した。

それを見てまた

坂本は背中に手を回して

「大丈夫、またたまにそっちの部活に顔出しに行くから…。」
ほら、みんなのところに戻り…。

…。
中井さん？」

首をかしげた坂本。

早川はもう部員のもとに戻って慰められていた。

「そうよ、なに？」

「いちゃわるい？」

えらそうに腕組んで見ている

中井に気付いた。

「いや、悪くはないけど…。」

吹部のメンバーじゃないのにとおもって…。」

「晴に誘ってもらったのよ」

「そっか」

「おい、敦史。」

もう飛行機出るんじゃないの？」

「あ、ホンマや」

「じゃ、またいつか

吹部に遊びに行くからなー」

タッタタタ。

坂本は走ってるはずだった。

なんかが服をつかんでいる。

後ろを見ると…。

中井がシャツをつかんでいた。

「な、何？中井さん」

「行かないで」

「え…。」

チュツ。

中井が坂本に背伸びして
キスした。

「ありがと、好きだったよ。
バイバイ。

ウチは吹部じゃないから
もう会えないや…」

ポタポタ。

中井まで泣き出した。

それに中井の背中に手を回して
「…ありがと」と言っていた。

運良く早川は泣いていて
それを見ていなかった。

しかし他の部員は見ていた。
「坂本ってモテるんだな」
という人物がいた。

そうして坂本を乗せた飛行機は
出発した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776n/>

Kiss

2010年10月9日07時30分発行